

## メディアを活用した英語授業の実践 : 映像教材の使用を中心に

その他のタイトル	Learning through Films:Developing Media : Based Tutorials for English and Cross Cultural Studies
著者	関口 英里
雑誌名	関西大学視聴覚教育
巻	28
ページ	68-70
発行年	2005-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/12030">http://hdl.handle.net/10112/12030</a>

# メディアを活用した英語授業の実践

## — 映像教材の使用を中心に

関口英里

### はじめに

近年の語学教育においては、各種メディアの活用が重要な鍵のひとつとなっている。本稿では、今年度筆者が担当する科目「イングリッシュ・メディアラボIIa/b」(LL教室利用・2クラス)における、メディア教材の利用と授業での実践について報告したい。

### 1. 授業の概要

#### 1-1. 授業のねらいと授業計画

本授業はメディア教材として映画を利用し、劇中で展開するさまざまな場面の日常会話を通して、リスニング力、スピーキング力、ライティング力などを向上させることをねらいとしている。また、ストーリーや会話内容の把握とともに、アメリカ文化に対する理解を深めることも重要な目標である。1セメスターのみの受講も可能であるが、前期・後期でそれぞれ映画の前半・後半を詳しく学習する授業計画をたてている。したがって、映画全編を通して学習するためには通年での履修が望まれる。

#### 1-2. 教材について

映画は『ミュージック・オブ・ハート』(*Music of the Heart* / 1996年 / メリル・ストリープ主演)を使用し、総合的な英語スキル修得のために、映画の内容に関連した多様なアクティビティーを行っている。この映画は、

バイオリン教育によってハーレムの子供たちに勇気を与えた女性教師の実話にもとづく感動作で、現代の生きた英語を学習するのに適した教材である。DVDメディアの使用で、字幕の切り替えによる効果的な学習が可能である。授業では、映画に沿って効率よく英語学習が出来るようデザインされた印刷教材(『ミュージック・オブ・ハート—映画／音楽／リスニング—』英宝社)をテキストとして使用し、音声教材(テープ)と併せて複合的なメディア利用の授業を行っている。また、英文スクリプトのデータをオンライン配布し、各自予習・復習に役立てたり、適宜印刷して授業に持参できるよう工夫した。

#### 1-3. 受講者について

文学部科目である本授業は他学部にも開講されており、受講者の所属は広範にわたる。それと関連して、英語スキルや異文化に対する知識にも若干の幅がある。とはいえ、受講者はおおむね初・中級レベルの英語力を有しており、学習意欲も高い。受講者人数は2クラス合計で約70名程度で、出席率も良好である。

### 2. 授業内容

1セメスターで映画全編の半分(テキストでは6課分)を学習するため、テキスト1課分を2週に分けて段階的に学習を行っている。1課ごとに割りあてられた映画のシーンは約

12分程度である。以下、毎回（1課分）の授業の流れについて概説したい。

### 2-1. 授業の流れ（各課・第1週目）

まず映画視聴前の練習問題として、各回のシーンでポイントとなる単語、フレーズを事前確認し、視聴時の理解力向上につなげる。独自作成の空所補充プリントを配布した上で英語音声テープにダビングし、リスニング力強化の自習問題としている。テキストに提示されている選択肢や記述は最後まで見ないこととし、各自の答え合わせに使用する。

次に字幕なしで各回の配当シーンを1回視聴した後、映画内容に関するテキストの正誤判定問題を行う。その際、回答をミニテストとして提出させ、平常点評価の一部に組み込んでいる。練習問題もテストにすることで、受講者は緊張感を持って取り組んでいる。また、答え合わせの際は、回答の根拠を英語で述べてもらい、会話練習の機会を増やしている。

### 2-2. 授業の流れ（各課・第2週目）

第2週目は、まず確認のため前回見た映画シーンを日本語字幕付で視聴する。その後、内容について踏み込んだ質疑応答を行い、理解を深める。次に、視聴シーンの会話聞き取りと空所補充練習のため、映画音声をダビングする。しかし単純に空所補充をこなすのではなく、リスニング力向上のための工夫を取り入れている。まずノーヒントでどこまで内容把握できるか、各自が聞き取り練習する。その後、独自に作成した空所補充のプリントを使ってディクテーションする、という手順である。キーポイントごとに英問英答で内容確認も行っている。

ノーヒントでの聞き取り練習の際には、4段階の聞き取り・確認ステップのガイドライ

ンを独自に策定している。まず第1段階は「試し聞き」として、音声を1回通して聞き、トピックや全体の流れをつかむようにする。第2段階では各種英語試験を想定して、テープを止めず、通しで会話文を数回聞き、内容を把握する「分析聞き」の練習を行う。第3段階として、各回の重要語句や音声的なポイント（音の連鎖、脱落などが起こる箇所）をふまえて作成した空所補充用プリントを使ったディクテーションを行う。第4段階は「確認と理解」として、プリントの答え合わせをしながら注意すべき語句や発音を確認し、文法事項などを解説する。最後に、英和対訳の SCRIPT を配布し確認を行う。

ディクテーションの後は、総括問題として、毎回の視聴シーンに出てきた文化事象にまつわるトピック、文法、専門知識その他について学習する。受講者自身の意見を述べさせる形で英語のディスカッションを行うようにしている。

## 3. 授業運営上の留意点

授業全体を英語ですすめるよう心がけ、複雑な説明事項以外は、質問・回答もできる限り全て英語で行うようにしている。若干高めのタスクを設定した方が学習効果が上がるようだ。また、毎回できる限り全員が発話できるよう配慮しながら質疑応答を行っている。

さらに学生の学習意欲を損なわないよう、回答に時間がかかっても最大限待つようにしている。回答が出ない場合には、英語でヒントを出し、最後まで自分で考えさせる。「わかりません」で終わらせない姿勢と英語での発話を習慣化することが重要だと考える。また、想定外の回答の場合も頭ごなしに否定せず、別の答えを探すよう指示する。

さらに教科書の内容と関連するさまざまな

話題を取り上げ、語学だけでなく異文化学習も行っている。アメリカの文化、生活習慣、価値観、社会情勢などを紹介しつつコミュニケーションをはかることで、受講者の知識拡大だけでなく適度なリラックスが可能になる。

#### 4. これまでの成果

上記の方法で授業を実践してきた中で、いくつかなの変化や学習上の成果が見られた。第一に、映画内容の理解度を試す正誤判定クイズの正答率が全体に向上する傾向が確認された。問題の内容や難易度は毎回異なるので単純に判定は出来ないが、回を重ねるごとに答え合わせ時の質問にも細かな点まで回答できるようになってきた。

第二に、間違いを恐れずに英語で発話しようとする態度が顕著になった。当初は回答を躊躇したり、日本語を使っていた受講者も見受けられた。しかし英語での言い換え練習を継続することで、全ての受講者が英語で積極的に会話を行うようになった。

第三に、異文化理解や文化比較への興味が高まった。学期末のレポートでは、アメリカの生活文化、教育制度、価値観、人間関係等々について、日本との比較分析を通して広範な論述が見られた。映画の視聴によって、ストーリーや英会話だけでなく文化的な側面にも注目し、様々な問題を考えるきっかけになったようだ。

#### 5. 今後の課題

今後取り組むべき課題としては、第一に、効果的な字幕提示の方法を探る必要があると考えている。日本語字幕は適度なヒントとなり、視聴後のディクテーションの際、英単語の類推に役立つ傾向が見られた。今後は英語

字幕ならびに提示タイミングが聞き取りや内容理解に与える効果について研究したい。

第二に、英語スキルの向上について更に工夫したい。具体的には、リスニング力測定のため、実力試験で時系列的な調査を行うこと、また、スキルのうち授業で手薄になりがちなライティング能力の育成に力を入れることなどである。スキル上達のためには、技法の伝達や学習時間の増強だけでなく、教員からのフィードバックも重要になるだろう。

最後に、1セメスターのみしか受講できない学生にも、きめ細かく対応したいと考えている。学生はテキストとスクリプトを所持しており、MMLなどで映画を視聴できる環境もあるので、継続的な自習が可能である。そのため、いかに自習すれば効率的かアドバイスしたり、自習中の質問を受け付けるシステムを作っておくなどの工夫を行いたい。

#### おわりに

印刷テキスト、音声、映像といった複数のメディアの立体的な利用は、総合的な英語学習にとって大変有効である。そして、現代の映画作品を教材とすることには、登場人物への感情移入やストーリー展開の期待による学習意欲の持続、さらにはアメリカ文化の現状理解などの利点がある。また、教師を含めクラスに参加している全員が90分間をエンジョイできることも、大きなメリットのひとつといえるだろう。

このクラスが縁で受講者の所属するESSクラブのスピーチコンテストで審査員をつとめさせていただく機会にも恵まれた。今後も学生とのコミュニケーションを大切にしながら映像教材やLL教室の利点を最大限に活用し、楽しい授業を展開できるよう努めたい。